

慈尊院

この神社は、高野山の開祖である空海という僧（諡号 弘法大師、774-835）によって 816 年に建立されました。慈尊院は当初、山のさらに高いところにある伽藍の「玄関」としての役割を担っていましたが、後に参詣者が宿泊したり冬の修行に参加したりする場所となりました。

19 世紀まで、女性がいると僧が務めから気をそらすおそれから、女性は高野山に入ることが禁じられていました。弘法大師の母である玉依御前もこの規則の例外とはならず、玉依御前は晩年を息子の近くで過ごすため慈尊院で暮らしました。母の死後、空海は母が悟りを開いたという霊夢を見ました。母を偲んで、空海は弥勒菩薩（未来仏）と母の両方の像を彫りました。空海はこれらの像を廟堂に祀り、寺に現在の名をつけました。

慈尊院は、長さ 24 キロの町石道という森林を抜けて高野山へと続く参詣道の起点です。空海は、毎月 9 回母を訪ねて慈尊院までの長い山道を下ったとされています。

慈尊院を訪れると、廟堂の近くに乳房の形をした供物や絵馬が数多くあることに気づきます。慈尊院は、1,000 年以上にわたって女性の参拝者を迎え入れてきた、日本でも数少ない女性特有のことがらに特化した神社のうちのひとつです。ここを訪れる女性は、妊娠中の安全やがんの闘病、さらには母乳の出について祈ります。
